日刊工業新聞

無断転載・複写禁止©㈱日刊工業新聞社

2014年度 さいたま市リーディングエッジ企業

SAITAMA CITY LEADING-EDGE

認証式であいさつする清水勇人さいたま市長（左）

さいたま市は2014年度の「さいたま市リーディングエッジ企業」として16社を認証した。11月7―9日にさいたま市中央区のさいたまスーパーアリーナで開かれたさいたま市商工見本市「コラボさいたま2014」の会場内で7日、各社に認証書を授与した。

認証された16社のうち、新規認証は、きもと（中央区）、住田光学ガラス（浦和区）、ハママツ（岩槻区）、山田マシンツール（中央区）の4社。朝日ラバー（大宮区）、アライヘルメット（大宮区）、後藤精工（中央区）、テクノスコープ（浦和区）、東京チタニウム（岩槻区）、日昭電器（岩槻区）、日新化成（西区）、日本電鍍工業（北区）、ハーベス（浦和区）、ベルニクス（南区）、ポーライト（北区）、渡辺製作所（桜区）の12社は継続認証となった。

認証式では清水勇人さいたま市長が「いずれも本市が誇る業界のトップイノベーター。この称号を得たみなさんには、さいたま市のモノづくりをけん引するエッジになってもらいたい」とあいさつ。続いて、清水市長、さいたま市リーディングエッジ企業認証審査委員会委員長で政策研究大学院大学名誉教授の橋本久義氏や同委員でさいたま市産業創造財団理事長の山縣秀司氏が、認証書とトロフィーを16社に贈呈した。

「さいたま市リーディングエッジ企業認証支援事業」は独創性、革新性に優れた技術を持つ市内の研究開発型モノづくり企業を「さいたま市リーディングエッジ企業」として認証する制度。リーディングエッジは「先端」の意味。さいたま市が認証する先端モノづくり企業の称号とも言える。

認証されると「さいたま市リーディングエッジ企業」の名称やロゴマークの使用権利が得られる。また市が日本語・英語併記の認証企業紹介冊子を発行したり、ウェブサイトで情報発信するなど認証企業を積極的にPRするほか、さいたま市産業創造財団をはじめとする支援機関と連携し、国際競争力向上やイノベーション創出に向けた高度な企業支援を提供する。

認証に当たっては「技術の優位性の高さ」「市場評価の高さ」「企業価値の高さ」などの視点で総合的に審査。産業技術や企業経営に関し識見を持つ委員で構成される「さいたま市研究開発型企業認証審査委員会」が認証の審査を行い、さいたま市長が認証を決定する。

もともとこの事業は08年度から「さいたま市テクニカルブランド企業認証事業」としてスタート。13年度までに累計61社が認証されてきた。清水市長は5月の定例記者会見で「高度化、複雑化するビジネス環境の中で、さいたま市を代表するモノづくり企業の国際競争力の向上やイノベーションの加速を支援することは、私の掲げる『成長戦略』でも重要なテーマの一つ」とし、14年度から同事業をリニューアルしたことを発表。同事業の6年間の実績を踏まえ、企業の国際競争力向上とイノベーション創出をさらに進めるため、名称も含めて見直した。

計16社を認証

認証記念パネルディスカッション

計16社が認証された2014年度の「さいたま市リーディングエッジ企業」。市は認証式の後に認証企業関係者らによる認証記念パネルディスカッションを開いた。きもと（中央区）常務の安田茂氏、住田光学ガラス（浦和区）常務の沢登成人氏、山田マシンツール（中央区）社長の山田雅英氏がパネリストとして参加。コーディネーターは、さいたま市リーディングエッジ企業認証審査委員会委員長で政策研究大学院大学名誉教授の橋本久義氏が務めた。

ディスカッションは「妥協なきものづくりでグローバルニッチトップ企業へ～さいたま市リーディングエッジ企業の挑戦～」がテーマ。

きもとの安田氏は「30年以上海外に進出して事業を営んでいる。グローバルに役に立てる企業を目指している。最も重視しているのは技術の追究。われわれはコーティングの事業を大きな柱にしているが、クリーン度の高い環境下で電子工業材料部品をつくっている。また地図は測量からスタートした。紙に記録して使われるが、そこで伸びない、縮まないという精密、正確さが求められ、われわれの技術の原点になった。業界にライバルがいない会社は成長しない。（きもとは）特殊なフィルムを買ってきてそれに表面を加工して、新たな価値をつけている。多様なライバルがいる。どんどん革新しながら事業を増やそうとしている」と事業を紹介した。

住田光学ガラスの沢登氏は「創立が1953年で、もともとレンズ用の光学ガラスを製造していた。われわれが販売しているガラスはほとんどが自社開発で、研究開発のおおもとになっている技術はガラスの組成の開発だと思っている。これまでさまざまな機能性ガラスなどをつくってきた。光ファイバーもつくっていて、それを医療機器にも使っている。この10年ぐらいでは医療機器向けの画像電送用の光ファイバーをつくり、サイズが小さく、細いものができた。われわれが医療機器分野に積極的に足を突っ込む一つの〝ネタ〟になっている。新しいガラスをつくるのが比較的得意で、われわれはそこに人を集中させている」と話した。

山田マシンツールの山田氏は「東京の台東区に本社があり、さいたま市に工場がある。もともと機械工具商だったが、機械工具商がモノをつくり始めた。つくっているのは刻印や刻印機といった非常にローテクなところだが、自動車メーカーや二輪メーカーなどを顧客とし、ハイエンドなところで仕事をしている。一番多いのが車台番号やエンジン番号、商標などだ。一番問われるのが見た目で、あとはいかに〝持つ〟（長持ちする）刻印をつくるかがテーマだ」と説明した。

橋本氏が3人にさいたまのメリットについて質問すると安田氏は「ルーツであるということで非常に愛着を持っている。2年前に新宿に本社があったのを戻してきた。われわれが育ったところの中で、地域に貢献していきたいというのが最大の理由」、沢登氏は「日本全国に比較的、簡単に行けるというのがこの辺のよさ。人材がいろいろなところから集まっている。ちょうどいい位置なのでは」と話し、山田氏は「日本全国どこからでもアクセスがいいので、来られる顧客が多い。また協力会社も近くに多くある。採用についても本社の台東区で募集して、さいたまで勤めてもらうということもぜんぜん抵抗がない」と強調した。

最後に橋本氏は「さいたま市はいい環境ではないかと思うので、その環境を活用してがんばってほしい」とエールを送り、ディスカッションを締めくくった。

山田マシンツール
山田 雅英社長

住田光学ガラス
沢登 成人常務

きもと
安田 茂常務

ハママツ
濱松 克嘉社長

ハママツ（岩槻区）は光沢加工機の製造、販売を主力とする。光沢加工機を手がける企業は国内に2社しかなく、濱松克嘉社長は「この10年はハママツが約90％の国内シェアを占める」と話す。

印刷業界から仕事を受けている加工業者が主な取引先だ。

光沢加工にはフィルムを表面に貼るラミネート、表面にニスを塗るコーティングなどがある。特殊な効果を出して付加価値をつけているという。本や雑誌の表紙やカバー、教科書、ノート、学校のアルバム、化粧品や医薬品のケースなど紙が使われているところは身近にたくさんある。

紙の使用量が減り、印刷業界が縮小するなか、新分野の開拓も進めている。平らなものに塗る技術は紙だけでなく、木材、ガラス、プラスチックの板などにも応用可能だ。「違う業界でもメリットがあると最近わかってきた」（濱松社長）としている。

コーティネーターは橋本久義氏が務めた

さいたま市CSRチャレンジ企業

今回は19社が認証された

さいたま市は2014年度の「さいたま市CSRチャレンジ企業」として19社を認証した。11月7―9日にさいたま市中央区のさいたまスーパーアリーナで開かれたさいたま市商工見本市「コラボさいたま2014」の会場内で7日、認証式を行った。

認証されたのはICST（中央区）、イシクラ（岩槻区）、泉製作所（岩槻区）、金久保製作所（岩槻区）、関東図書（南区）、ケント・コーポレーション（浦和区）、コッコト（中央区）、さいたま造園（見沼区）、サイボウ（見沼区）、ジオファイブ（緑区）、秀飯舎（西区）、中央測地（南区）、ツルゲン情報（北区）、デサン（北区）、ノースコーポレーション（浦和区）、ハッピースマイル（西区）、フォレストファミリー（南区）、マルチメディアシステム（見沼区）、明成（浦和区）の19社。

認証式では清水勇人さいたま市長が「本日をCSR経営を推進する新たなスタートラインとらえてほしい」とあいさつ。続いて、さいたま市CSR推進会議委員長で埼玉県経営者協会名誉会長の利根忠博氏が「目標をつくって挑戦し、企業価値を高めてほしい。CSR企業が数多く出てくればさいたま市は発展する」と話した。

さいたま市はCSRの推進を図ろうとする意欲のある市内中小企業を「CSRチャレンジ企業」として認証し、CSR経営の向上支援を行っている。12年度から毎年度実施し、昨年度までに21社が認証されている。

認証審査には申請企業に対し、財務経営状況、ワークライフバランスなどの労働環境、社内コミュニケーションをはじめ、市が開発した90項目のCSRチェックリストをもとにヒアリング調査を行い一定の基準に達しているとを確認。CSR推進会議での審査を経て、今後、CSR経営を積極的に取り組む姿勢を確認できた企業を認証している。